

特集

口蹄疫被害を再検証

2010年口蹄疫発生からこれまで

—— 宮崎県養牛農家の「気持ち」を振り返る

酪農学園大学 蒔田浩平
NOSAIみやざき 吉岐佳浩

2010年4月20日に宮崎で発生した口蹄疫は、発生農場292戸とワクチン接種の後に殺処分された農場1011戸の合計1303戸の農家で飼育されていた家畜約29万頭の尊い命を奪い、多大な犠牲を払った上で終息しました。2012年は発生から2年、口蹄疫清浄国復帰からも1年が経つとともに、2011年3月には東日本大震災が発生したこともあり、宮崎県の畜産農家と関係者以外の人々にとって、口蹄疫はすでに過去のものになりつつあります。この経験を風化させないため、2011年8月にNOSAIみやざき北部センターにて、宮崎県内の被災養牛農家と口蹄疫で経験した精神的ストレスについて参加型調査を行いました。参加型調査では、自分の農場での殺処分を経験した若手の酪農家2名と和牛繁殖農家1名、和牛一貫経営農家1名そして肥育農家2名の養牛農家計6名が、1枚の模造紙を囲んでそれぞれの想いを語り、たくさんの小さな紙に1つずつ生の声を載せていきました。ここでは、参加者が語ったその1人1人の声、想

いをまとめました。

口蹄疫の発生、ウイルスから農場を守るために

【生産者の声】

口蹄疫の発生当初、マスクミで大々的に取り上げられたことで風評被害の拡がりや考えられ、もう少し気を遣って欲しいと感じていました。発生が拡大していく中、心に余裕がないので何を言われても、嬉しいけれど腹が立っていました。「頑張って」と声を掛けられるたび、辛い中、消毒など頑張っているのに、「さらに何をどう頑張るのか」と言いたくなりました。防疫作業にかかりきりになり、年離れた祖母の面倒が見られないので、他県の親戚が来て助けてくれました。消毒は、家に入りする家族にもせねばならず、自分の子に消毒薬をか



▲経営再開後、牛を導入する農家

けなければならぬのが可哀そうでした。農家同士はお互い気を遣って声を掛け合うこともできませんでしたが、接触することによる感染拡大を恐れて、会うことさえも憚っていました。女性は美容院に通う必要がありますが、美容院で他の農家の奥さまと遭遇してしまうこともあり、とても気を遣いました。近くのスーパーへ買い物に出るのも難しい状況が続きま

した。外出はできず、子供を学校に行かせなかったという農家もありました。

自宅へ人が入ることも、とても気を遣いました。回覧を持って行って怒られたこともありましたが、自分の家にも持ってきてもらいたくありませんでした。新聞は止め、電気と水道の検針も断りました。電力会社と水道局はその間、断る前と同じ額を請求してくれ、口蹄疫終息後に差額を請求してくれました。

発生拡大は恐怖でした。川南町で発生が終息してくれるよう、付近の市町村では懸命の消毒作業が続けられました。川南町とは川で遮られている西都市に、1日のうち2件も発生が飛び火したのは、とてもショックでした。

行政の対応

【生産者の声】

口蹄疫発生中の行政の対応は、効率が悪く気をもみました。しかし、口蹄疫発生時は、もし他県で発生が

あったとしても同様に混乱したのではないかと思います。具体的にはまず、川南町には国、県、町、3つの口蹄疫対策本部が乱立し、指揮系統が乱れていました。道路の消毒ポイント設置、道路封鎖などの要望を上げてタイムリーに通らず、縦割り

行政の弊害で管轄を跨いで柔軟に繋いでもらえません。2010年5月18日に、東国原知事(当時)により非常事態宣言が出され、体育館など公共施設が一時閉鎖されました。発生から1年以上経って冷静になった今だから確信して言えますが、

口蹄疫の発生があった場合は、非常事態宣言は初発時に出すべきでした。また、防疫作業で忙しくしている時に、県から電話調査が入るのが煩わしかったです。

ウイルスの農場への侵入

【生産者の声】

自分の農場へウイルスが入り、口蹄疫が発生すると、ストレスの内容は変わっていきます。発生農家では、

被害者であるのに加害者扱いをされました。最初に発生した農場では特に加害者扱いが強く、非常に辛い思いをしたのではないかとということが話されました。発生後の日々の作業では、これから動物たちが処分されると分かっている間、餌を与え続けなければならないことがとても辛かったです。

殺処分を振り返って

【生産者の声】

これまで愛情を込めて大切に飼育してきたのに、改めて家畜だから殺処分しなければならないと割り切ることを迫られる現状に立たされました。殺処分には立ち会った方もいれば、立ち会わなかった方もいました。殺処分の日は、子供には家に帰って来ないように伝えました。これから何が起こるのかは、伝えることはできませんでした。妊娠中の奥様がいらつしやる農場では、奥さまに心配を掛けたり、悲しい思いをさせた

りするのが非常に辛かったそうです。そういった精神的ショックが奥様の体やお腹の子に障らないかとても心配でした。

小規模の繁殖農家では牛を自分の子供のように育てており、殺処分時には母と子牛は同じ色のリボンで結び、埋却時にできるだけ同じ場所に埋めるようお願いする農家が多くみられました。埋却地には、花輪と焼酎が手向けられました。

殺処分作業は作業動線に防疫上の問題があり、清潔であるべき作業動線と汚染されている作業動線が重なっていました。実際、農場での殺処分では、入り口を1カ所に設定することが難しいことが多いと思いますが、このような疑問がストレスになりました。殺処分中には気が張っていて悲しんでいる余裕はなかったけれど、いざ処分が終わってみると、消毒で真っ白になった牛がいらない牛舎を見た瞬間、心に空洞ができてしまつて、何をすればいいのか分からなくなり、とても辛い思いをしました。

そのように悲しく空虚な中、県の

臨時事業で他の発生農場での殺処分
応援作業の雇上げ制度が始まりました。
これは、殺処分が終わった当該
農家が、他の農家の殺処分の手伝い
をする制度です。自分の農場での殺
処分時に仲間が応援に来てくれたの
を見てほっとしたという方がいまし
た。また、辛いけれど自分も他の農
場の役に立たなくては、という思い
で応援作業に参加された方もいまし
た。参加することにより、困ってい
る仲間の話を聞いて力になって良か
った、辛い殺処分という作業を通し
ただけでも、畜種を超えて参加農
家と仲良くなれて良かった、という
前向きな気持ちを持つことができま
した。他の農家に殺処分を手伝って
もらうのは、仲間の存在にほっとす
るだけでなく、農家だから段取りが
分かっており作業が効率的に進むの
で、ありがたかったそうです。

ワクチン接種の開始

2010年5月22日に、殺処分を
前提としたワクチン接種が開始され

ました。ワクチン接種は非常に迅速
に行われ、わずか4日間で1066
農場、12万568頭の動物に接種
されました。このような緊急事態で
は、十分なインフォームドコンセン
トをしている余裕はありません。農
家の中には、ワクチンは予防的なも
のと勘違いしており、後で殺処分さ
れることを知ってショックを受けた
方がいました。

またある酪農家では、ワクチン接
種後に牛乳を出荷できると思ってい
たのですが、集乳車の代わりに来た
のが産廃車であり、牛乳を廃棄しな
ければならないことでショックを受
けました。ワクチン後、殺処分と分
かっていた農家は、ワクチン接種決
定後、接種しに来るのを待っている
時が精神的に辛く、打った後は早く
処分してあげて欲しいと願っていま
した。

一年経って

【生産者の声】
再開できた養牛農家では、発生後、

畜産の様子が変わりました。防疫の
考え方が変わり、現在は他の農場や
家畜がいるところへは行きづらくな
りました。以前は、子供は自由に牛
舎に入ることができましたが、今で
は自分の子供でさえも牛舎への立ち
入りを禁止しています。牛を飼うこ
とによって人にも優しくなるという
農業を通じた子供への教育効果があ
ったのですが、今はそういった効果
が期待できないのが辛いです。

再開への不安

2011年8月末時点での口蹄疫
被災農家の再開率は、酪農家で85%、
繁殖農家で55%、肥育農家で78%と
なっています。再開しない理由には、
高齢のため、補償金が得られ、経営
上借金がなくなつたため、また複合
農業経営では耕種農業など他の部門
に専念することなどが挙げられまし
た。

【生産者の声】
再開への第一歩の、観察牛（ウイ
ルスがないか確認するため導入す

る牛）の導入時には、発症したら防
疫体制がいい加減だと思われるし、
出たら今度は再建できないと感じて
いたので怖かったです。導入までの
ブランクが長かったので、感が衰え
導入時に牛がとて大きく見えまし
た。また、ブランクが長くなればな
るほど、まだ土地にウイルスが残っ
ているのではないかとという恐怖心が
大きくなりました。

終わりに

これまで養牛農家の受けたストレ
スについて紹介して来ましたが、酪
農、繁殖、肥育、そして一貫経営と
いう異なる経営形態では、それぞれ
受けたストレスの種類が異なること
が見えてきました。殺処分という動
物の死から来るショックという点で
は、長く母牛を飼い、お産をさせる
繁殖農家と酪農家、特に繁殖農家で
大きい傾向が見られました。しかし、
肥育農家、一貫経営農家でも口蹄疫
による心の傷は大きく、参加者さま
んがとて心気丈に振る舞っていま

だが、言葉の端々や表情、そして担当獣医師からの話を総合しますと、口蹄疫で受けたショックは相当に大きいものでした。ここに書かれている内容は、筆者が作ったものでも、個人々人からのインタビューでまとめたものでもなく、被災農家自身が会話という形で語ったものです。

この調査に参加された農家の方々には、調査を通して辛い気持ちを仲間と共有することで復興へのさらな

る一歩を踏み出して頂けたら幸いですし、被災養牛農家の読者の方々に、全国へ想いが伝えられることで復興の糧にしていただけたらと思いません。また、全国の養牛農家の方々にはこれを読むことで、口蹄疫を過去の記憶として風化させないよう努めるきっかけにしたいだけならば幸いです。今後とも、宮崎畜産のさらなる応援をお願いします。



▲経営再開後に誕生した子牛とその母牛

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））

大規模災害や犯罪被害者等による精神疾患の実態把握と対応ガイドラインの
作成・評価に関する研究

平成23年度 総括・分担研究報告書

発行日 平成24(2012)年3月

発行者 研究代表者 金 吉晴

発行所 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 成人精神保健研究部

〒187-8553 東京都小平市小川東町 4-1-1
